

身近なまちの風景物語(12)

温もりの灯り

通りを歩くと、そのまちに関わる人たちの思いを感じることがある。まちの風景を意識した気遣いが玄関や軒下、店先にも表れる。

それは小さくても、あるいはほんの少しだけでも構わない。例えば軒下の一輪挿しにも住まい手の気持ちが込められる。店先の提灯や暖簾は、単に誘客のためだけではなく、歩行者の目も楽しませてくれる。風になびくその姿が風景に動きを与えてくれる。

それが一軒だけではなく、歩きながら右に左に見かけると、通りの一体感を味わうことができる。と同時に、まちの人たちの共通した思いと取り組みの印象を強くする。

土浦の中城通りはその一つである。城下町時代に街道だったこの通りは、かつて第一の繁華街だった。現在では見世蔵や袖蔵が保存され、築後百年も経った伝統的建造物もみられる。

この通りを歩くと、軒下や店先に統一感のある色彩とデザインが施された暖簾、同じデザインの木製行灯が迎えてくれる。

これらは中城通りにある店舗の後継者たちの取り組みである。彼らはまち並みに関する勉強会を重ね、その実践として暖簾と行灯を試行することを決めた。ひとまず1セット用意し、各店舗で1週間ずつ設置した。

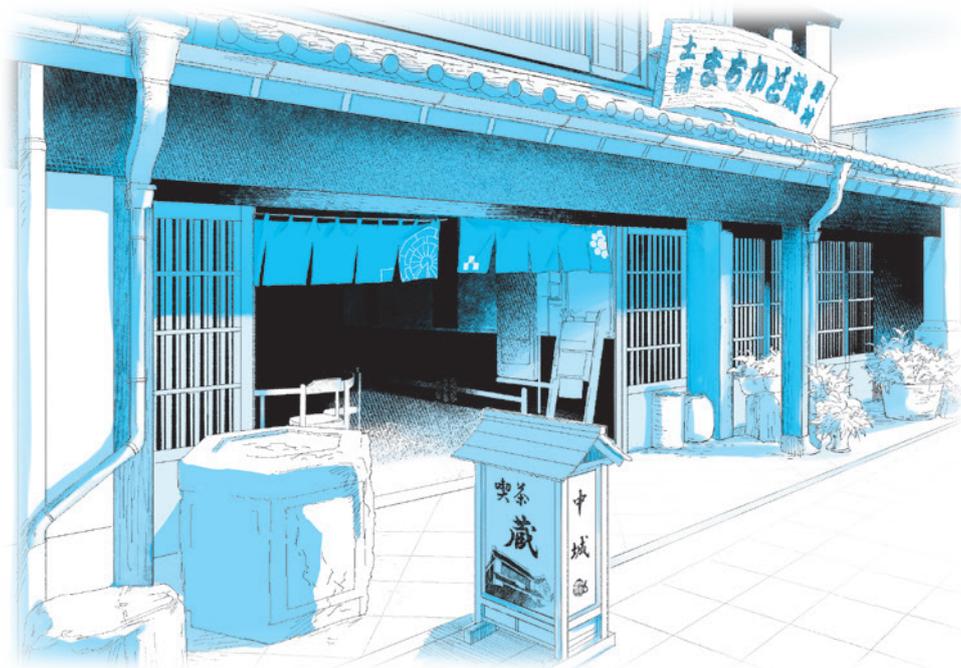
時間をかけて、その効果と課題を検証し、設置可能な店舗を中心に、暖簾と行灯を制作した。店によって、その掲出箇所によって、暖簾の大きさや描かれるデザインは異なるが、統一感だけは保たれている。

行灯は、仏壇・仏具製造の後継者が手弁当で制作した。細部にもこだわりがみられる。さらに店舗ごとに手作りされた絵や文字が組み込まれている。これも勉強会を通して試行錯誤しながらつくられたという。

一つの方向性を共有した同世代の後継者たちの実践が、まちを訪れる人たちの目を楽しませてくれる。そうした取り組みを知らない来訪者も、この風景を見て、手作りの温もりを味わうことができる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）